

# 被災地の人々 —クアンチ省(ベトナム)—

写真・文 寺本 実  
Minoru Teramoto



戦死した兵士たちの墓石が並ぶ。  
身元不明者が多い

二〇一一年三月一日、東日本大震災が日本を襲った。ケースは異なるが、ベトナムの人々も多くの手厳しい経験を乗り越えてきた。

二〇一〇年九月末から一〇月前半にかけて、ベトナム戦争時に枯葉剤が大量に散布されたクアンチ省を枯葉剤被災者の調査のために訪れた。ベトナム戦争中、中部に位置するクアンチ省は南北ベトナムの戦いにおいて、南ベトナム側の最前線に位置した。北ベトナムから南ベトナム地域に人員、物資を送り込むホー・チ・ミン道路はこの地からも伸びており、また、アメリカ軍の重要拠点がこの地に存在したために、枯葉剤が大量に散布されることになった。クアンチ省をめぐる攻防など、歴史に残る激戦も同省で展開された。現在も世代を超えて多くの人たちが枯葉剤への被災により苦しんでいる。

ベトナム北部に位置する首都ハノイ市から、中部のクアンチ省までは車で一二時間ほど。朝六時二〇分頃ハノイ市内のホテルを出発。午後一時頃にゲアン省ウインの食堂で昼食をとり、クアンチ省ドンハーに到着したのは、夕方六時四六分であった。車内で長く座り続けたため、下車後、体が揺れているような感覚がしばらく続いた。

翌朝、クアンチ省人民委員会に挨拶にうかがい、調査を行う地域としてC県を紹介された。早速、C県を目指し、車で国道九号線をラオス国境方向に進んだ。

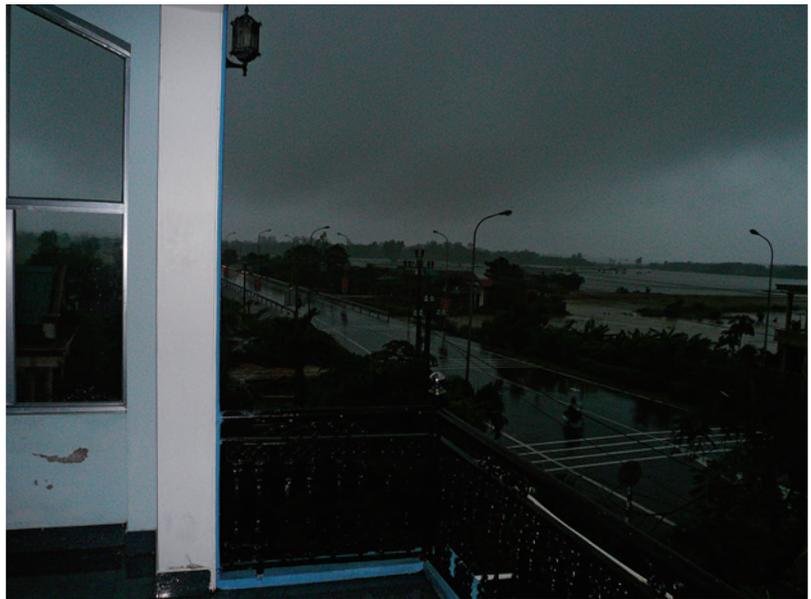
途中、大きな墓地があり、車が止まった。運転手のVさんの兄がここで眠っているという。結婚を決めたフィアンセもいたVさんの兄は、ベトナム戦争に参加し、行方不明となった。ハノイ市内で二人の霊媒師にみてもらったところ、具体的位置は異なるものの、二人ともこの墓所の同一区画に眠っているとの判断を示した。管理事務所で少し話をうかがった後、墓所に向かう。ゆるやかな勾配を上り、辿り着く。よく見ると、未だ身元が分から

▶クアンチ省ドンハー市内。  
中央にアメリカ軍戦車の  
残骸が見える

▼調査にご協力いただいたご家族



▼養豚を営む家庭も



▶調査の初日以外は雨模様が続いた

ない兵士の墓石が当たりを覆っていた。Vさんはハノイから持参した果物、タバコ、酒、お祈り用の「ドル紙幣」と線香を供える。そして、紙に清書してきた文書を読み上げ始めた。それがすむと、周囲の墓石に線香、タバコを供えて一本一本火を灯す。日本のものより大振りの赤色の線香の上部が頭を垂れた形になると、埋葬された人たちが受け入れてくれたことを意味するという。南北ベトナムの垣根を超えて、こうした人たちがこの国の現在を支えている。お参りが終わる頃、写真屋さん、無心目的の男性が上がってきた。生きるための営みがここにもあった。

その後、C県の中心部にある同県人民委員会に挨拶と協力の要請にうかがい、調査地はA村に決まった。宿泊先のC県中心地から調査地のA村までは、バイクで省道を正味二十分ほど走る必要があった。道は舗装された山道。赤土が剥き出しの所もあるが、部厚い緑が辺りを覆っている。

初日、雇ったセーオム(バイクタクシー)の運転手がカーブで、携帯電話を操り始めた。何ともいえない心地であった。

A村。ベトナム戦争中に枯葉剤が散布されたこの地で、人々は暮らしている。中には、戦争中に父親が殺害された場所で暮らしている人もいた。

庭にゴムの木、胡椒、お茶、ミット(パラミツ)などを植えている人たちが多く、重要な生活資源となっている。養豚を営む家庭もあり、鶏も自由に庭を歩き回っていた。調査期間中は初日を除いて雨模様が続き、せっかく育っていた稲が水没してしまったが、稲作に従事する人もいる。インタビュを終えて失礼する際、球状をした黒色の胡椒の粒を、袋一杯に詰めて持たせて下さる人もいた。

ゴム栽培の教室が開かれていた。調査に協力いただいたご家庭で収穫の様子を見せてもらった。庭に整然と並んだゴムの木。そのうちの一本の下方につけられた、らせん状の切り口をナイフでなぞると、純白の樹液がじわり、じわりと下で構えたお椀にたまっていく。そのお宅のゴムは一キロ一五〇〇〇ドンとのことだった。

数日後、お話をうかがったQさんの母親の百歳の記念パーティーに招かれた。小さな老婆の顔には深いしわが刻み込まれていた。憐れみなどけっして寄せ付けない威厳を備えた老婆の楽しみのひとは、タバコであった。

祝宴当日。この日も雨。宴のために設営された厚手のビニールを張った仮設小屋を、雨が断続的に打ちつける。せっかくの宴の日に晴れを願ったはずの繊細な人たち。思いを内に押し込めて明るくふるまう。この日、老婆は赤い帽子と赤い服を身に着けていた。筆者が記念撮影を行い、それがすむと、宴が本格化した。各テーブルには、茹でエビ、鳥肉料理、豚肉料理、バインテット（豚肉と緑豆の餡を入れたベトナムちまき）、食パン、スープ、ビール瓶などが並ぶ。味付けは北部より辛めだ。百人を超えると思われる参加者たちが相手を見つけては互いに握手し、身体を寄せ合う。話す者は話し、飲む者は飲み、食べる者は食べる。頃合



▲うっそうとした緑が繁る



▶雨に濡れても子供は元気だ



▲純白の樹液（ゴム）が滴り落ちる



▶村のリハビリ・センターで訓練に励む女性



▲100歳となったお婆さん◎と娘さんの記念撮影

いを見て会場を後にする人、とどまる人。赤みを帯びた、たくさんの笑顔の花が咲き、にぎやかな時が流れた。やがて、マイクを持ち出し、家中の若者が司会者となって歌の時間が始まった。村で獣医を務める女性が踊り始める。やがて筆者にも歌えとの声が上がった。断り続けたが断りきれない。少し考えて谷村新司さんの「昴(すばる)」を選曲する。「目を閉じて何も見えず 悲しくて目を開ければ…」何とか中盤を持ちこたえ、終盤に。「さっば、すばるよ」で終えるはずが、「すばる、すばるよ」と歌ってしまっただ…。その後、皆さんに挨拶をすませ、筆者は次のインタビュー先に向かった。

二〇一一年、ベトナムは枯葉剤が同国で初めて散布されてから五〇年という節目の年を迎えた。幾多の困難を乗り越えてきたクアンチ省の人々の営みは、これからも続く。



▶路傍に咲いた花

▼お婆さんの100歳を祝う宴に集まった村人たち



てらもと みのる／アジア経済研究所 東南アジアⅡ研究グループ

専門は、ベトナム地域研究。主な著作に『現代ベトナムの国家と社会—人々と国の関係性が生み出す〈ドイモイ〉のダイナミズム』(編著、明石書店、2011年)、「ベトナムの障害者の生計—外部環境とのかかわりについての事例調査を通した考察—」(森壮也編『途上国障害者の貧困削減—からはどう生計を営んでいるのか—』岩波書店、2010)など。